

## Usefulness of cell block cytology for preoperative grading and typing of intraductal papillary mucinous neoplasms (IPMN).

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2014-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 門前, 正憲 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10470/30810">http://hdl.handle.net/10470/30810</a>

## 主論文の要約

Usefulness of cell block cytology for preoperative grading and typing of intraductal papillary mucinous neoplasms (IPMN).

(膵管内乳頭粘液性腫瘍の術前診断におけるセルブロック細胞診の有用性)

東京女子医科大学 消化器内科学

(主任：立元 敬子教授)

門前 正憲

Pancreatology 第13巻 第4号 369頁～378頁(平成25年6月3日発行)に掲載

### 【目的】

膵管内乳頭粘液性腫瘍 (IPMN) は拡張膵管内に粘液産生性の乳頭状を呈する上皮性腫瘍で、悪性化のリスク、癌の組織型、予後は組織学的亜型によって異なることが知られる。術前の悪性度診断には、内視鏡的膵管造影 (ERP) 下に採取した膵液細胞診が行われてきたが精度は低い。本研究では、組織形態が保持され免疫組織化学染色が可能なセルブロック細胞診による IPMN の診断精度について検討した。

### 【対象および方法】

2010年7月～2011年12月の間で術前 ERP 時に膵液を採取し、外科的切除が行われた IPMN23 症例を対象とした。採取した膵液の細胞成分を目視にてキャピラリーで採取しアルコール固定後にパラフィン包埋し、セルブロックを作成し、HE 染色とムチン免疫 (MUC) 染色を行った。組織学的亜型は、WHO 分類に基づき上皮異型度と胃型、腸型、膨大細胞型、胆膵型の4種類に分類し、セルブロック細胞診と切除標本の病理所見を比較した。

## 【結果】

セルブロック細胞診による評価が可能であったのは20例であった。20例中10例が主膵管型/混合型、10例が分枝型であった。セルブロック細胞診によるIPMNの亜分類は主膵管型/混合型では胃型5例、腸型3例、膨大細胞型1例、胆膵型1例であったが、すべて手術標本の結果と一致し、分枝型では胃型9例、膨大細胞型1例であったが、胃型1例を除き、手術標本と一致した。セルブロック細胞診によるIPMNの上皮異型度の感度は主膵管型/混合型で67%、分枝型で33%であった。

## 【考察】

IPMNの膵液セルブロック細胞診と手術病理診断での組織学的亜型分類の一致率は極めて高く、術前のIPMNの組織学的型分類はセルブロック細胞診を用いれば高い確率で可能であると考えられた。しかし、上皮異型度の感度は十分ではなく、その理由として、セルブロック細胞診の細胞数が少ない場合や、癌化した上皮の占める割合が少なく相対的に高度異型細胞数が少ないことが上げられた。

## 【結論】

セルブロック細胞診は従来の細胞診に比べIPMNの組織学的亜分類をよく反映し、上皮異型度診断は補足的な役割であるものの、術前診断の精度を高める方法として有用と考えられた。